

||||||| 記 事 |||

消 息

何故永富独嘯庵は蔵鷺庵に埋葬されたか

黒川 達郎

黒川醫院

平成28年10月30日(日)に大阪天王寺区上宮町の蔵鷺庵で行った「永富独嘯庵250回忌」の法要の際に、蔵鷺庵第22代住職の磯田芳竜氏(写真1)から、「永富独嘯庵はどうしてこのお寺に葬られることになったのでしょうか」と聞かれ、答えに窮した。筆者は独嘯庵の自由闊達な気風に、大阪という土地柄があったので終焉の場として選んだのであろうと漠然と考えていただけであった。

また、磯田住職は「戒名がないのも不思議です」と付け加えられた。しかし、独嘯庵に戒名というのはいかにも似合わない。自由奔放に生きた独嘯庵が亡くなって大人しく戒名に取まるとは思えない。しかし、これらの考えは印象論にすぎず、これまでわかっている事蹟を整理して「何故永富独嘯庵は蔵鷺庵に埋葬されたか」を考察することにした。



写真1 蔵鷺庵第22代住職磯田芳竜氏

独嘯庵の研究者として、富士川游氏(1865~1940)、寺師睦宗氏(1923~)、栗島行春氏(1926~2010)などがある。

そこでまず先達の著述について、「何故永富独嘯庵は蔵鷺庵に埋葬されたか」の点に焦点を絞り、分析した。

富士川游氏の著述

『富士川游著作集7』¹⁾に掲載されている『本朝医人伝』の独嘯庵の項には、「天資脆弱、明和元年より痰喘を憂え、病に寝ぬ。然れども嘗て其業を廃せず、義母妻子郷里より来たりて其病を見る、居ること五閏月にして病少しく癒ゆ、之をして郷に還らしめ、自から優遊養衛す、而かも復た起つべからざるを知りて、遺書を門人某等に託し、遂に三年丙戌三月五日を以て浪華の僑居に歿す、時に年三十又五、門人相議して天王寺蔵鷺庵に葬る。」とある。

ここでいう門人とは小石元俊や小田泰である。生前、埋葬について独嘯庵の希望が門人たちに伝えられていたと考えるのが自然である。

『富士川游著作集8』²⁾にある永富独嘯庵伝補遺には、蔵鷺庵を選んだ理由について直接触れた記述はない。ただ墓石の墓碑を書いたのが亀井南冥の弟である僧宗華の筆によることがわかる。そこで宗華の関係した京都の大徳寺と蔵鷺庵について調べてみたが、無関係である。

寺師睦宗氏の著述

『漢方息游三十年』³⁾には「大阪の地に落ち着いたのは、保守的の貴族的な京都より革新的の庶民的な

大阪の土地柄が彼の肌に合っていたのではなからうか。これは大塚先生の説である。」とある。さらに「それはともかくとして、独嘯庵は大阪の地に腰を落ち着けることになった。この年の十二月二十七日付で、門弟亀井南冥にあてた書簡に、(浪華の高麗橋南備後街第五街に客たり)と記してある。」さらに「翌十三年の冬になり、健康のすぐれなかった独嘯庵は、寒疝を病み、十四年の五月まで南の郊外に転地する破目になった。彼はこの静養期間、よく逍遥散策した。時には近くの禅寺の蔵鶯庵を訪うて、高僧と清談のひとつきを過ごしたであろう。」と寺師は書いているが、十分にありえる話である。

『漢方医学書集成14』⁴⁾の寺師の解説には、「東奔西走、南船北馬の後、独嘯庵は宝暦12年(1762)31歳の暮れ、大阪の地に腰を落ち着け、医業の傍ら著述に従事した。が、健康にすぐれなかった彼は寒疝(泌尿器系の結核性疾患)を病み、明和3年(1766)「御定の死生命あり、老仏の不生沙汰何かせむ、いづれもさらば千万」の絶筆を残し、永遠の眠りにつく。時に僅か35歳の若さであった。蔵鶯庵に葬らる。」とある。ここではその理由については触れられていない。

粟島行春氏の著述

『醫聖永富独嘯庵』⁵⁾にある亀井南冥による独嘯庵先生墓碑の碑文を見ると「明和丙戌3月5日、浪華に客死す。享年三十有五。」とある。客死とは文字通り旅先で死ぬことであるが、大阪の地に住んだことも旅と捉えているのかもしれない。

著者の筆による「永富独嘯庵の生い立ち」の、第二十四章「独嘯庵、浪華に死す」の項に最後の様子が書かれている。「いづれにせよ独嘯庵は、生来の虚弱に加えて梅毒を患い、自らその治療体験を通じ、浪華にあっても数多くの梅毒患者を治療し、『癩瘡口訣』なる一書を残している。「多病自ら、隠者に似たり」と『独嘯庵先生行状』にあるように、最後は落ち着いた家庭の人となり、病に抗することはできず閑静な境地に入り、静養にこれつとめたのである。……ここに永遠の眠りについたのである。」とときに齢三十五歳。明和三(1766)

年三月五日のことであった。亭叔や元俊らの門弟たちは、相謀って悲しみのうちに、遺骸を浪華城内の禅林、蔵鶯庵に葬った。場所は現在の大阪市天王寺区上之宮町にあたる。」とあるが、やはり蔵鶯庵に葬った理由については触れていない。

ところで、たまたま『漢方の臨床』1月号⁶⁾に掲載された松本一男先生の新年の言葉に「縁とは不思議なもので、我が家には、今をときめく伊藤若冲翁の水墨画を三幅所有していますが、若冲翁と関係が深かった売茶翁の書幅も所有しています。江戸時代を代表する医師であった永富独嘯庵も、最晩年の売茶翁の許で百日間ほど教えを受けていたそうです。……」とあるのを見つけ、独嘯庵と売茶翁の関係について着目した。

売茶翁(1675~1763)は黄檗宗の僧で煎茶の中興の祖でもある⁷⁾。独嘯庵とは57歳の年齢差があるが、晩年に交流があり、独嘯庵が亡くなったのは売茶翁没後僅か三年である。

『独嘯庵先生行状』小田泰・永富潜には「売茶翁に岡崎に参すること百有餘日薪水自から給す。翁その才を奇とし、屢々僧たることを薦め、これがために観音の名を唱ふること日に五百遍なり。而して先生肯かず。又去りて浪華に客たり。」とある。

『葆光秘録』には「葆光翁は居して洛下に隠る。春は花開き、秋は葉を染むる毎に、染茶具を京山諸刹に荷して茶を路傍に売り、二十銭を得れば則ち休む。」とある。

売茶翁が独嘯庵に僧になることを勧めたのは、もちろん独嘯庵の資質を考えてのことであろうが、独嘯庵が病弱で死期が近いことを配慮しての可能性もある。

売茶翁と蔵鶯庵の関係は資料でも磯田住職に尋ねても確認することは出来ないが、売茶翁の示唆で蔵鶯庵が選ばれた可能性は否定できない。

売茶翁について詳しい記述は避けるが、たまたま筆者の実家である黒川家に翁の書があるので紹介する(写真2)。83歳であるから亡くなる6年前の書である。

ところで蔵鶯庵という寺のことを詳しく知りた



写真2 黒川家所蔵の売茶翁の書

いと考へ、250回忌からちょうど一か月後の11月30日に筆者は再び蔵鷺庵を訪れ、磯田住職に蔵鷺庵の成り立ちと特徴などについて、話を伺った。

磯田住職によれば、始祖の天桂伝尊禅師(1648～1735)は、江戸中期に起こった曹洞宗復興運動の中で主流派に対する反対派で、異端派とされたという。禅師が亡くなった年に、独嘯庵はまだ4歳で直接の交流があったとは考えられないが、寺は異端の気風を持ち続けたというので、あるいはそのようなことも選ばれた理由の一つかもしれない。磯田住職に話を伺った際に『蔵鷺庵始祖天桂伝尊禅師略年譜』⁸⁾という書籍を頂いた。

ちなみに、蔵鷺庵の名は山号を名月林といい、寺号の蔵鷺とともに、中国曹洞宗の祖洞山良介の「宝鏡三昧」の初めの部分に、「銀盃に雪を盛り、名月に鷺を蔵す」とあるところから採って、開山の天桂伝尊が命名したという。

また独嘯庵と直接の関係はないが、蔵鷺庵は阿波の蜂須賀家と関係があり、家紋は逆卍であるという(写真3)。

考 察

独嘯庵は後世方を学び、古医方を学び、吐方を学び、オランダ医学を学び、さらに白砂糖の製造



写真3 逆卍の家紋

法を学び、さらに郷里下関にサトウキビを栽培させるなどまさにマルチな才能を持つ天才であり、医者という範疇に到底収まる人物ではない。

また自由闊達な精神の持ち主であり、時には師匠の山脇東洋の行いを諷めることもあり、よく知られているように吉益東洞が自分が死んだ後は独嘯庵の時代が来るであろうと言わせたほどの器である。

ヒエラルキーの確立された京都の寺に葬られたくなかったと推察できる。また当時の蔵鷺庵の住職と波長もあったのであろう。

病に肉体は負けたかも知れないが、独嘯庵の反骨のスピリッツは最後まで健在であったと思いたい。

現在、わかっている事蹟ではここまで推察するのが精一杯であるが、今後新たな事蹟が判明する可能性は低く、現時点では、このような理解で問題ないを考える。

参考文献

- 1) 富士川英郎編集『富士川游著作集7』思文閣出版1980
- 2) 富士川英郎編集『富士川游著作集8』思文閣出版1980
- 3) 寺師睦宗『漢方息游三十年』名著出版1990
- 4) 近世漢方医学書集成14名著出版1980
- 5) 粟島行春『醫聖永富独嘯庵』農山漁村文化協会1997
- 6) 松本一男「新年の言葉」漢方の臨床第64巻第1号2017
- 7) ノーマン・ワデル、樋口章信訳『売茶翁の生涯』思文閣出版2016
- 8) 藤田信夫編『蔵鷺庵始祖天桂伝尊禅師略年譜』1990